あさ

4

2011

恩田秋夫の一茶俳句切手

日本の美Ⅱ「さくら」美術年鑑社より

そよげそよげそよげわか竹今のうち　一茶
せい出してそよげ若竹今のうち
若竹と呼るゝうちも少かな
あつぱれの大若竹ぞ見ぬうちに
わか竹をたのみに思ふ小家哉
わか竹やさもうれしげに嬉しげに
若竹のわかい盛りも直過る
わか竹や枕の上も夜の雨

一茶の若竹の句は理が勝つてゐるが、先生の選ばれた句はその中ではおとなしい。若竹に若い女性を配した切手の作品は一茶の句を補填して余り有る。荻窪の先生の裏庭は竹林であつた。

あと

四月

紅い鳥

冬欅一枝たりとも欺かず
熱燗をはやく呑まねばならぬ也
跳べるかとみてゐる春の小川かな
梅花よりちいさく紅い鳥を飼ふ
柏餅母が計りし身丈裄

本町三　佐藤喜孝

⊕

新調の絹の靴下春近し
雪原にぽつと人影ふはと消ゆ
樟の葉のさはさはさらと日向ぼこ
雪あそび笑くぼ変らず右側に
瀞に揺れ流れに呑まれ浮く椿

落合　森理和

⊕

過ぎし日や一片残る冬紅葉
雪しぐれ昼餉の饂飩すすりをり
朝寒し夫の鬚摘む日課かな
ガラス器に伸びし芹摘む朝餉かな
陽を追ひて鉢植廻す浅き春

東大宮　山荘慶子

⊕

まだ海は鉛の重さ黄水仙
マスクしてマスクを避けて帰りたる
活花のかさと擦れ合ふ霜夜かな
雪明り温泉街は坂ばかり
氷上の真ん中にゐて静かなり

本町三　吉成美代子

⊕

温め酒素風をすくふ掌
枝垂梅吸取紙の戯繪かな
かばかりの寺の銀杏朝日受く
硯海の昼月擦りをろす三日
やはらかく噛みてひとひのさくら餅

鍋屋横丁　吉弘恭子

⊕

声張らぬ鴉群れゐる余寒かな
携帯の高笑ひに鴨泳ぎ寄る
料峭の日比谷公園人疎ら
けんけんと踏みたき丸きうす氷
地震の国の友無事に在り水温む

清瀬　赤座典子

⊕

三ケ日雀も下りる庭しずか
喰積の鮭のテリーヌまたたくま
数の子の上段にぬるほこらしげ
黒豆の去年今年かけふっくらと
年賀状思はぬ人にいただきぬ

聖蹟桜ケ丘　安部里子

⊕

刺鎧ふ木木の芽吹きのやはらかく
裏木戸を開けてさへづり近づきぬ
蟷螂の卵をつけて山椿
陽を返す土塁の址のつくづくし
七十の記憶で土筆の袴解く

曳舟　遠藤実

⊕

冬帽子かすめて烏とび去りぬ
海岸にベンチ野ざらし春吹雪
東から西から風に小雪舞ふ
暮るる海ゆらりと寄せる小春凪
雪となるあしたの庭の楽しくて

逗子　鎌倉喜久恵

総持寺

春日爛爛鶴見に御移転から百年
春風駘蕩巡る鶴見の七福神
新到の意を決し来る二月かな
涅槃会の朝荘厳春の雪
うらら日や僧衣かしこみ綴れ刺す

川崎・小田栄　木村茂登子

春隣

鷲掴みに叩く鍵盤春よ来い
ビブラフォンの桴も弾んで春隣
じっくりと子の言ひ分を春隣
春隣至福の時はと子に問はれ
幸せは子の笑顔だよ春隣

白金　斉藤裕子

⊕

大朝寝この世の他の人に逢ふ
暗渠上微かに春の水の音
雪道に合格祈願の守り札
冬の駅死ぬまで靴を磨きます
時流る和音のやうに春ともし

京橋　篠田純子

⊕

冬たんぽぽ米寿となりし誕生日
ビル風によろけてしまふ夜寒かな
躓いてたたらを踏んで春時雨
ペットボトル湯湯婆として文机
春一番浅草橋の行交ひに

宝泉寺前　芝宮須磨子

余寒

水餅のボウルがいつも此処を占む
無縁塚朝だけ冬日あたりけり
梟よ布団のすそに死神が
時計の鳩鳴きに出てきて日脚伸ぶ
余寒かな溶接明かり夕べ見て

剱地東出（つるぎちひがしで）　定梶じょう

二月尽

海ほたる朧の中の入日かな
房総の真ん中は山春の昼
ミモザ咲く只一行の日記今日
綿雪やふいの別離を受入れず
東京に雪の積りて二月尽

所沢　須賀敏子

林檎

犬小舎の奥に犬ゐる二月尽
大寒の市ヶ谷上空機影さす
返り血の一点もなき障子かな
掌の林檎の上気卒業す
かさなれば沈むばかりぞ浮寝鳥

浦和　竹内弘子

春の楠

春の雪隣家の灯うすくなる
寒椿心に支へ欲しき日の
口に出しもうすぐ春と言ってみる
保ちゆく自分の歩幅鳥雲に
すれちがふものらに春の楠立てり

田端　田中藤穂

⊕

水琴窟宇宙に響く冬の朝
美しく哀しくもあり流し雛
雪道に一本だけの黄水仙
黒松の闇夜に続く寒の月
大松明春の夜空に散る火の粉

参宮橋　續木文子

掛蕎麦

胸中に打つものひとつ鬼やらひ
掛蕎麦の大盛雨は雪となる
春の雪いつもの道に旅心地
白い息ワーッと言ってゐるかたち
雪しまき眼鼻口てふ顔の穴

三光坂　東亜未

如月

如月に入りて行事の立続け
如月の洋服ダンス開きたる
見ゆる物皆ゆっくりと牡丹雪
昼過ぎの夜の如くなり牡丹雪
手術終へ苦しげな顔牡丹雪

富田　長崎桂子

⊕

玻璃ごしの浮雲一つ冬ごもり
乾ききる庭に一茎水仙花
ひさびさの雪ついばめる雀どち
だしぬけに目白くるなり春動く
白梅の足元に散る別れかな

大宮　早崎泰江

⊕

東京に雪を降らしめ無帽なり
母を失ひ二二六と雪のこる
雪の叉銃とかがり火　二二六あの日
子は母を母は子を見失ひ春
笑ひ顔だけ残って二月尽

河田町　堀内一郎

一人一句

元旦の自販機の灯の濃くありぬ　佐藤喜孝
福は内畳天井なつかしく　堀内一郎
孫弟子の増えし喜び初茶の湯　森山のりこ
繭玉や歳重ぬるも尚欲す　森　理和
初日の出土手ゆく我の長き影　山荘慶子
城壁の荒き縁あり石蕗の花　吉成美代子
時空からあらゆる力枝垂梅　吉弘恭子
雪埋む線路の先に狐ゐて　赤座典子
早春のせきれい車道をすいすいと　安部里子
寒紅の母は本日退院す　遠藤　実
海山のひといろになり寒茜　鎌倉喜久恵
古寺の僧の雄叫び除夜の鐘　木村茂登子

前月作品

仕舞湯をたあっぷりにして除夜の鐘　斉藤裕子
縄張りも恋も捨てたり冬の猫　篠田純子
皮靴のかきわけて行く鴨の中　芝　尚子
きさらぎの制服の丈短すぎ　芝宮須磨子
まゆ玉を吊らん脚立が置いてあり　定梶じょう
子供らの瞳の中の淑気かな　須賀敏子
お太鼓結び真ん中にしてエレベーター　竹内弘子
たれかれに話しかけたき寒暮かな　田中藤穂
山茶花の散りて静かに雨上る　續木文子
蹲踞の湯桶嬉しや姫椿　東　亜未
初日さす祖父の名のある六地蔵　長崎桂子
大寒の竹林うごき止まりをり　早崎泰江

喜孝　抄

三月作品より

定梶じよう

元旦の自販機の灯の濃くありぬ　佐藤喜孝

町筋に自販機が立てられてその数が増え出した頃、ある句会の席題の一つに、「自動販売機」が出されたことがありました。まだ「自販機」などの略したことばの無い頃でしたろう。当今のようにマイコンで制御されている機械とは違い、缶は出てきたがお釣りが切れて出てこない、ということが珍しくない時代です。その時の高点句が〈身に入みて釣りの出ぬ自動販売機〉。

此の句を私がとったかどうか定かではありませんが、つまらぬ句を記憶しているもの、とは思います。

そして現代。自動販売機が「自販機」と略されるようになって、俳句、川柳に時々とりあげられるようになります。

掲句、日の出直前の一景。作者は、その灯に淑気を感じとっているのでしょう。そして「濃くありぬ」で写生句としたのです。

四五年はこの世に長居豆を撒く　堀内一郎

「長居」とは、どちらかといえば迷惑な所作。しかしこんな迷惑なら四，五年と言わず、二〇年でも三〇年でも。そして数十年後の節分にも、こんな句を拝見したいものです。

時空からあらゆる力枝垂梅　吉弘恭子

直線は一次元、大地が二次元。それに空間を加えると三次元。で、相対論は時間を加えてこれ全て時空世界、というそうです。要するに「宇宙」と思えばいい。

そして、鉄も人のからだも、全て宇宙由来のものなんだそうです。地球のあらゆるものは時空間の力による、というわけです。枝垂梅も勿論その一つ。そして引力にしたがってしだれ、風にゆれて咲く。

我々も梅もそんなことはつゆ知らないけれど。

牧場と看板ひとつ雪野かな　赤座典子

「駒とめて袖うち払ふ陰もなし　云々」という古歌がありますが、広い、雪の牧場に看板がひとつ。袖の雪をうち払うもの陰もない道東の風景。静寂。

随分むかしのことですが、遙かに看板があって近づいてゆくと、「この辺り看板立てるべからず」とありました。

白萩を分けて分けて阿弥陀さま　鎌倉喜久恵

中七に脱字がないとしたら、急ぐさまを言いたいための字足らずでしょうか。面白い。披講上手が披講すると、字余り字足らずに少しも違和感を感じないものですが、ともかく、萩のしだるる細道をかき分けるように阿弥陀堂へ急ぐ。裾に触るる白萩。その先に阿弥陀さま。

生きてゆく歩みゆるめて年迎ふ　芝尚子

ふり返れば忙しい一年。そして元旦。生の歩みを少しゆるめて年を迎えたいと思う。数日たてばもとの忙しさに戻るのを承知の上で。

冬萌やＤＮＡといふ不思議　芝宮須磨子

理解出来ないが分る、使える，ということは沢山ある。携帯電話然り、自動車だってそう。今回震災にあってしまった原子力発電も、理解しているわけではないが、ともかくその電気は使っている。ＤＮＡもそう。しかし人は、そんなことを余りふしぎと思わない。そして真冬萌え出る芽であれば、こそ、そのＤＮＡのふしぎを須磨子さんは思った。

秋草の雑多を広口瓶に挿す　竹内弘子

「雑多」とありますから、草花が種々入り混じっているのです。乱雑、無秩序とは違う。「活ける」という事の秩序がその中にあるに違いありません。雑多にして整然。

〈瓶の芒野にあるごとく夕日せり〉林火の句は細

首の瓶でしょうし、掲句は広口瓶。そして、林火の句は数本の芒でしょうし弘子さんの句は雑多の秋草。どちらも西洋の人に理解されにくい芸と思うのですが、かつて、英国出身の女性で野の草花をみごとに活けて出展されているのを見たことがありました。その時もたしかに広口瓶。そしてその中心にうす紫の小花が幾輪か挿されていてアクセントになっているようでした。あれは何の花だったのか。

寒中の金星枝に止まり居る　　東　亜　未

先月号作品に〈落ちる日のまっしぐらなり枯木中〉吉成美代子がありましたが、掲句もうまい。もっとも、「止まり居る」を、小鳥のように止まっている、と読んではまずい。動きをとめている、とどまっている、と読むべき。美代子さんの句の、丁度反対のところを東亜未さんは読んでいるのです。

寒さ盛りの頃なればこそ明星もその動きを止めてしまうのです。

吟行案内

スカイツリー界隈

日時　五月十四日（土）十一時
集合場所　東武伊勢崎線「業平橋」改札
申込先　3371-4623（佐藤喜孝）
五月十日までご連絡下さい。

矢切の渡し

日時　六月二五日（土）十一時
集合場所　北総電鉄「矢切」駅
予定コース　矢切駅→野菊の墓文学碑→矢切の渡→柴又帝釈天→京成「柴又」駅
参加希望者は六月十五日までご連絡ください。

佐藤喜孝

近世俳諧と漢詩文　四一

王　岩

史記を見て

列伝や只紙魚ひとついき残り　　逢　里

『柞原集』に見える逢里という人の作である。『史記』とは中国前漢の歴史学家司馬遷の著で、上古の黄帝から前漢の武帝に至るおよそ二千数百年にわたる通史である。全書は本紀十二巻・表十巻・書八巻・世家三十巻・列伝七十巻の計百三十巻から成っている。

句中に詠まれた列伝は『史記』の中で、個人の伝記を集めた部分である。「孟嘗君列伝」や「管晏列伝」や「游侠列伝」など七十巻の列伝は多くの歴史上の人物を描いた。

『史記』の「列伝」を開いて読もうとする作者は紙魚を一つ発見した。「列伝」に取り上げられた人々は文字の中にしか残っていないが、紙魚は生き残っている。

あをかき集

堀内一郎選

予報士の顔和やかに春立てり　木村茂登子
冴返る渡る人なき歩道橋
梅日和天神様へ女坂
白亜の堂たわわにしづかミモザの黄
クリオネも共に流氷接岸す
通院の変更きかぬ日春一番
一途とふすさまじきもの猫の恋

遺計からこぼれおちたり薄氷　吉弘　恭子
枯葎倭国内騒騒騒
山眠る家内に潜む鼠ども
案内板横目に枯葉枯木道
たちあがりつまづいてゐる木の葉かな
うららかや時々動く足の指　篠田　純子
初夢に母のよそれる飯無限
永らへて誰に見しょとて寒の紅
いたはらぬことが労りヒヤシンス
春光や視床下部から中枢へ
二・二六思へば昭和寒かりき　田中　藤穂
ひっそりと雛飾られて寺の小間
待ちかねし路地の黄梅咲きはじむ
老ひてより心の通ふ豆の花
ミモザ咲く家の住む人いまだ見ず

春泥に歩幅狭まる谷中墓地
ぬる燗や急降下せる春の雪　森　理和
伸子つけ友禅の川春まつり
花影の汀女の花は紅の梅
寒牡丹ちりゆくさまをみせまじく
楪や傘立の杖納めらる
土器のやうなお皿に入れて蕗の薹
擦れ違ふ乳母車にも冬帽子　森山のりこ
幼児に飴玉もらふ梅三分
雪原の子馬の眠り涙溜め
買ひ求む魔女人形や春の街
春立つや心洗はれミサの鐘
でこぼこの風呂敷包み春愁　遠藤　実
春の雨背骨のふしぶし音をたて
春光の届く大地にあまたの目

白梅の満開にして言葉なし
春の宵知らない我が歩き出す
啓蟄を猫がもどりぬ血まみれに　佐藤　喜孝
臘梅のはじめをはりのうあやむやと
朧月空が好きなるあかんぼう
芹過ぎてよりさらさらと水かろし
街路樹のまだとげとげと花粉症
初蝶の鱗粉余しよびたてり
こんにやくに林のやうに針供養　鎌倉喜久恵
やうやくに小枝装ふ冬木の芽
年毎にふえてゆくなり福の豆
夏みかん撓わな家のたたずまひ
献血を呼びかけてゐるバレンタイン
八十歳八十本のスイトピー
河満ちて小舟揺さぶる寒蜆　長崎　桂子

数寄屋門木槌とんとん春隣
鉢植を今朝は四温の置きどころ
波頭低くなりたり浅き春
ビルも無き木造家並蕗の薹
織元の盆梅の白凛として　赤座　典子
冠木門雪解雫のまっすぐに
膝掛けやジャズコンサート春遅し
雀色時の辞書引いてゐる春の風邪
春めくやシャツバンザイに干されあり　東　亜　未
路地裏の話のはずむ雪の朝
漢字好きカタカナキライ三学期
白髪の女片膝春の部屋　須賀　敏子
飯能の老舗を巡り雛祭
猫とゐる可憐なしぐさ春の雨　安部　里子
立春の年間行事可決する
冴返る自分にかける可能性
弧をかいて氷上のテント並びをり　吉成美代子
待つほかはなし黙ってわかさぎ釣る
榛名山雪降りけむる音もなく

佳句後言

通院の変更きかぬ日春一番　木村茂登子

大方予約制なので、同じ医師に診てもらうのが常である。病状によっては体に堪える。折しも強風の春一番。お察しする。

遺計からこぼれおちたり薄氷　吉弘　恭子

遺計とは「手ぬかり」「死後にのこすはかりごと」とある。予想が思わぬ展開を生む。世は無常に尽きるようである。うすらいのはかなさ。私事だが継母故血のつながり無く法律上遺産は一切弟の手へ。

枯葎倭国内騒騒騒　〃

漢字一色で緊張感が漂う。八百長、政治混迷、経済不況の矢先に、東日本大地震が発生した。枯葎の日本の行方は他事ではない。

いたはらぬことが労りヒヤシンス　篠田　純子

過保護を戒めたのである。依頼心が昂じると子供にしても高齢者にしても良く無いとされる。時には邪慳に突き放すことも。

二・二六思へば昭和寒かりき　田中　藤穂

二・二六を知る人も少なくなってきた。新聞も多くは語らない。私は殊にこの年二月一日母を亡くしたので暗く寒い思い出ばかり。二・二六の雪だけが鮮明に。

楪や傘立の杖納めらる　森　理和

楪で新年の風景が見えてくる。さて、中七の「傘立の杖」でつまづいた。「傘立てに杖」なら年始廻りの初詣の高齢者を思い浮べるが。どこへ納めたかが気になる。前に柩に杖を入れたのを覚えているので。作者に聞いてみたい。

買い求む魔女人形や春の街　森山のりこ

好奇心にかき立てられる。若さの証である。時に春魔女人形の妖しさに心引かれて。現状からの脱出でもあろうし。勿論欲求不満も。

白髪の女片膝春の部屋　須賀　敏子

高齢だから気にせぬのか。手仕事等を持つ人は往往にあるようだ。韓国の女性は若くても、この習慣は残っている。しかし一般的な女性とは思えぬ。意外な様相を包込む春の部屋の和み。

鈴木多枝子さんと俳句

佐藤喜孝

寒しと言ひ曇り空だと言ひ足しぬ

この句は昨年の三月号に発表されてゐる。多枝子さんは良い意味で上手い俳人であつた。この句などつくづくさう思ふ。読む度に作者が今ここにゐて呟いてゐるかと思つて仕舞ふ息づかひがうかがへる。しみじみとした思ひの湧く佳句である。地道に勉強されてゐたやうだ。多枝子さんは家族旅行で欧州と北海道に遊んだ。

アルプスの干草返す農婦見ゆ
アルプスの涼風を受けヨット行く
縞の目の太き西瓜もモネーリア

一九九九年の『飛行船』に発表の句より。一見旅情に浸つてゐるやうだが、ふるさとに足を確り置いた目線を意識して読まれてゐるやうに思ふ。

北海道旅吟もくりかへし後年まで作句してゐた。印象に残つた旅だつたやうだ。しかし多枝子俳句の一番のテーマは生地千葉につながる人や風光である。

故郷は何もなけれど墓参
菜の花やふる里を図で教へけり

菜の花の句は昨年六月の『あを』に発表。今も千葉に遺る生家の辺りを一人娘さんに図を描きながら説明してゐる。小さな紙をはさんで頭をつきあはせてゐる和やかな時間だ。〝菜の花〟はまさにふるさとへの賛辞である。俳句に確りとテーマを持つて向きあつていた多枝子さんは私の先生でもある。

悼
言足してまだ言ひたりぬ春の宵　佐藤喜孝

鈴木多枝子さん

吉弘恭子

二月二五日午前十時半、屋上に洗濯物を干していた。遠くで電話が鳴っている。誰も居ないのか出る気配がないので急いで二階まで下りていった。

突然電話から「ははがけさなくなりました」と聞覚えの鈴木ひろみさんの声が耳に入った。

今日は四月一日だったかなと、咄嗟に思ってしまった。

二日前いつものようにわが家の店の椅子で俳句の話をして「もう少しすると暖かくなるから、俳句一句でも『あを』に出せるように頑張る」と明るい顔で言われていた。「楽しみにしてるね」と……。

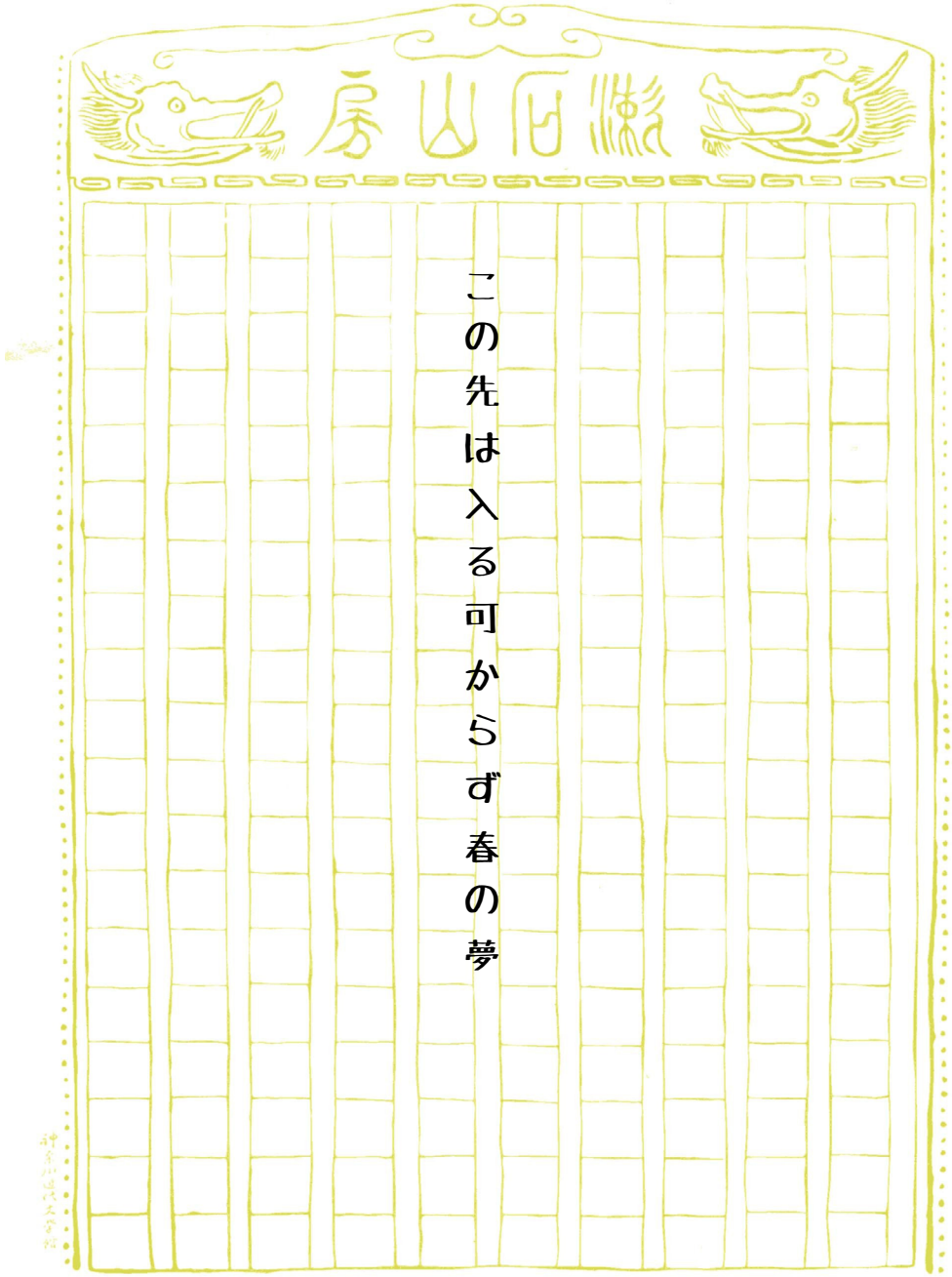
二十四日夕方のお使いの帰り道、多枝子さんの一家が食事をしていられるのが窓から見えていて、夕食の支度を急がねばと思いながら帰宅した。

ひろみさんから電話のあった朝から自分がどんな行動をとったのか未だに記憶の外である。

昨日もお使いの帰り道、多枝子さんが食事をしているかなとつい見てしまっている。鈴木家が新築してからの十年ほど私が日課にしている行動である。これは今日まで続いている「多枝子さん食事終ったかな」と……。

俳句にお誘いして二十年ばかりたつが、俳句の仲間としてもおつきあいが出来嬉しい限りであった。

追悼
ふりむいて振向けずゐる梅の花　吉弘　恭子



あを柳集

兼題　可　　佐藤喜孝　選

この先は入る可からず春の夢

いかやうにも読める柔らかい句である。私の夢に他人さまはここから先には入つて来てはいけませんとも、或はこんな楽しいことが続くはづはないと警戒自重ともよめる。まだ他にも読めるがそれぞれの読みに魅力がある。作者のあづかり知らぬことである。

兼題の「可」は俳句に使用するのが難しかつた。皆様に苦労をおかけしたと反省してゐます。兼題・席題は眼前にはないものを表現するのでリアリテイに欠けがちである。注意すべき事であるが難しい。「可惜夜の櫻ながむるふたりかな」＝〝あたら・あたらよ〟は普段目にせぬ言葉であるが魅力的な響きを有してゐる。〝ながむるふたりかな〟は〝あたらよ〟に力負けしてゐる。「月おぼろ可からずとある路地に猫」＝は〝可からず〟に一考、兼題に振回された。「可も不可も生きてるあかし春の雪」＝は深海を心意を述べ〝春の雪〟で優しく包まれてゐる作。「可も不可もなくて傘寿の春にあふ」＝これは自身を顧みての作だが前句と似た作り。「不可避なる災害列島春立てり」＝まさに日本に住む限り、いや地球に住む限り大なり小なり自然災害はついて回る。〝春立てり〟で前途に明るさを求めてゐる作者がゐる。

題詠「可」（順不同）

可惜夜の櫻ながむるふたりかな　吉弘　恭子
春宵や紅花いろに可良の糸
車座の可く呑みまはる薄櫻
散るさくら可動堰から食み出だす　篠田　純子
春埃この暴君を倒す可し
月おぼろ可からずとある路地に猫
可もありて不可もありたる猫の恋　東　亜　未
春動く可睡斎てふ寺忍者めく
可も不可も生きてるあかし春の雪
春光や可想界てふ摩訶不思議
可も不可もなくて傘寿の春にあふ　木村茂登子
梅日和水戸老公の可可大笑
草萌ゆる可と書かれたる駐車場　長崎　桂子

不可避なる災害列島春立てり
不可思議や夜の桜に目を凝らす
春障子可愛い指の穴は孫　田中　藤穂
この先は入る可からず春の夢
可も不可もなき日日の目刺焼く
雲重し春場所中止可決せり
巨津波可美葦牙彦舅尊（うましあしかびひこじのみこと）よ　佐藤　喜孝
ＤＮＡは不可思議な紐四方拜　（旧作）

参　考

不可逆性虚血性銀河ニ帰ラナム　夏石　番矢
短夜や乳ぜり泣く児を須可捨焉（すてつちまおうか）　竹下しづの女
可愛いです面倒です玄関の燕　八木　健
どんぐり拾ふ病院の許可時間　細見　綾子
可惜夜のとばくちにゐる黄粉鳥　八田　木枯
可惜夜の今年竹の節伸びる音　中原　道夫

あをキーワード俳句辞典（きき―きけ）

帰郷

綿虫や母は帰郷を果せずに　篠田　純子
帰郷終へ戻りし部屋に冬のバラ　斉藤　裕子
故郷の山澄む時の帰郷かな　西本　春水

利く

詰め利かぬ言葉あれこれ梅雨ざさす　関口　ゆき
微調整利かぬ左手羽抜鶏　赤座　典子
夏負けてスープに利かすハーブかな　森山のりこ
酢を利かせ飯粒立たす五月かな　芝　尚子

聞く

敗戦日聞こえるやうに声を出せ　吉弘　恭子
花粉症猫のくさめも聞こえたり　須賀　敏子
句座帰り余韻のごとくちちろ聞く　芝宮須磨子
空蝉を拾ひ集めつ蝉を聞く　早崎　泰江
云ふことを聞かぬ癖つ毛春の風　篠田　純子
越天楽聞く昼さがり籐枕　長崎　桂子
かなかなを聞くや朝比奈切通し　鎌倉喜久恵
見ざる聞かざる云はざる人ら傷林檎　田中　藤穂
終りまで聞くか聞かぬか日向ぼこ　木村茂登子
笑ひ声聞こえる写真水鉄砲　斉藤　裕子
羽子つきの聞こえぬままに羽子日和　芝　尚子
聞きたきこと聞かせたきこと花の雨　鈴木多枝子
長閑なる診察台でラジオ聞く　吉成美代子
星月夜笙ひちりきを聞くごとし　定梶じょう
引鶴や我が恋仇の訃報聞く　遠藤　実

奇遇

節分草出会ひはいつも奇遇なり　森　理和

生薬

生薬のやうにしぐれ煮冬はじめ　佐藤　喜孝
生薬の飴売る屋台夏祭　鎌倉喜久恵
隠り世の生薬屋におく榠樝の実　吉弘　恭子

気位

紫に気位高く鉄線花　河合　笑子
群青色気位高く四葩咲き　芝宮須磨子

伎芸天

夏に入る伎芸天女の流し目も　田中　藤穂

二月の句会

傳　中野区・カフェ傳

寒戻る渡る人無き歩道橋　茂登子
玻璃ごしの浮雲一つ冬ごもり　泰　江
うららかや時々うごく足の指　純　子
右ひだり靴のへりぐせ冬帽子　喜久恵
クレパスの十二に余るもみぢかな　恭　子
身体に尻尾のなごり枯木道　綾　子
海ほたる朧のなかの入日かな　敏　子
じっくりと聞く子の言ひ分を春隣　裕　子
神のごと万象に名を付けゆく子　喜　孝
雪原にぽつと人をりふはり消ゆ　理　和
寒椿こころに支へ欲しき日や　藤　穂
雪女郎真赤な鳥居異界あり　文　子
お茶会の梅一枝の力かな　実
咳き込んでなにか言はんとせし母か　弘　子
検診の俎上にありて冴返る　敦　子
活花のかさと擦れあふ霜夜かな　美代子
風二月ベンチよりどりみどりかな　典　子

調句会　浦和・岸町公民館

蓬摘むうしろばかりが氣になりて　喜　孝
自転車をおきざりにして田芹摘む　綾　子
春風を入れ晋平のピアノ室　敦　子
陽を追ひて鉢植廻す浅き春　慶　子
口に出しもうすぐ春と言つてみる　藤　穂
鴨引いていよよ幼しかいつぶり　弘　子

七座句会　中野区・小川苑

跳べるかとみてゐる春の小川かな　喜　孝
掛蕎麦の大盛雨は雪となる　東亜未
二・二六思へば昭和寒かりき　藤　穂
小高きに如意輪観音春を待つ　綾　子
一本に光集めて辛夷の芽　尚　子
山茱萸の黄の幼くて曲り道　夏　子
町中に幅を利かせる猫の夫　純　子
マフラーの巻き方左右女学生　須磨子
川幅に友禅六筋春迎ふ　理　和
手枕の小猫の鼻のひやとしむ　恭　子

傳句会　毎月第2火曜
カフェ傳　森　理和
(03-3368-4263)

調句会　毎月第3金曜
岸町公民館　竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会　毎月第4火曜
小川苑　吉弘恭子
(090-9839-3943)

あとがき

先月につづいて二人の訃報をお知らせせねばならぬとは残念である。渡邉友七さんは退院されて自宅で静養されてゐたが奥様が気がついた時はもう冷たくなつてをられたさうです。森山のりこさんは有料老人ホームに移られて一月余。お体には人一倍気をつけてをられたのですが……肺炎とのことです。電話口であを十周年記念ののりこさんの句集を喜んでをられたのが昨日のやうです。世の中も身の回りも気ぜわしく流れてゆきます。

「近世俳諧と漢詩文」は今月で41回になる。わが国と中国文化の係はりの深さを再認識するとともに、王岩さんの博識にも舌を巻く。今月の〝逢里〟は聞いたことのない俳人。「柞原集」とともに調べたが影が少し見えただけであつた。王岩先生のもとには膨大な資料があるのだらう。毎月先生の採り上げる近世俳人に毎月楽しく振回されてゐる。先生から地震お見舞をいただいた。桜の二句を添へ力づけてくださつた。

家破れ日本は在る桜咲く　　王　岩

頑張れと咲き誇りたる山桜

〈喜孝〉

二〇一一年四月号

発行日　四月二十六日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090-9828-4244
佐藤喜孝
竹僊房
印刷・製本・レイアウト
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）